
生かし屋キラー

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生かし屋キラー

【Nコード】

N8247Y

【作者名】

活字の錬金術師

【あらすじ】

日本

今、日本は突如地球上に現われた自らを快樂人と名乗る人達に支配されている

今の日本は墮落しすぎている、今や人殺しは日常茶飯事だ。 警察も日本から消えた。

そこら辺に死体が転がっている状態・・・と言うわけではない 快
楽人という人達に支配された日本にも法律はある

無法地帯と言うわけではない

が

ほぼ無法地帯だ、ただ法律はある 死体は指定された所に必ず埋め
ることだ

今日本は 二つの職業が増えた

殺し屋と死体埋葬屋だ

人を殺す人と

人を埋める人だ

殺したり 埋めたり 今の日本は腐っている

こんな日本には殺し屋がいる 自分で恨みを持っている人を殺した
ら 恨みを買って 殺される

みんな自分が殺されるのがイヤだ だから 殺し屋という職業に頼
むのだ

その殺し屋の中でも殺した人が最も多い生人きとという青年がいた

ムウーウ（前書き）

この物語は自分が描いた漫画の読み切りをすこしイジリ、小説にしたものです。あまり長くはやらないので
少しの間だけ おつきあい下さい

ムウーウ

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように
生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

エピソードグー依頼

「じゃあな」「また明日」「おう！仕事がんばれ！」

飲み会が終わり店から出てくる男たちの声が響く

「里田武か・・・」

突然空から声がした

里田武と呼ばれた男はふと上を見上げる

ビルに立っている男が目にはいった・・・

「殺し屋キラー執行！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時はさかのぼる・・・

ボリッボリッ　せんべいをかじる音がきこえる建物

そこには『キラーン家』と書いてある布がぶらさがっている

ザーザッザザーッ　ゴゴゴゴゴー！

ちょうど台風の来る時期であった

ガラッ！！！！キラーン家とかかれた建物の戸が開かれる

「いらっしやい・・・なんかあんの？」

ゴロロロロッロ！

戸をあけた男の後ろで雷が鳴る

「殺してほしいんだ・・・」

「里田を・・・アイツを！！！！！」

「アイツのせいで！！アイツのせいで俺の会社はZONYとの交渉
が・・・！！」

「ふうーん」

興味なさそうな声がきこえる

「そいつどこにいの？どんな顔？」

男は懷から写真を取り出し　里田がよくいく飲み屋を教えた

「さーて仕事すつかなー」

殺し屋キラー

人を殺し依頼主にみせ金を受け取る シュミと自分で言っている

第一章

ム
ウ
ー
ウ

里田が見上げた先には仮面をかぶつて 黒い服を着ている男がいた

高層ビルの上から跳んできた・・・

もう一度

高層ビルの上から・・・跳んできた

高層ビルだ！……高層ビルの上から跳んできたんだ！……自殺！？

つきの光で落ちる男は光る

だっ
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

見事に着地した！しかし男の足はまったく震えていない
 どういう体をしているのだ！？

黒い男の左目が光った

シシシシ

身長 171.5 cm

West 70 cm

BCDがCO
FがC

腰から100cmは・・・

— — — — —

この情報を元に死体作成・・・

עֲדַעְדָּעֵי הַשְׂמִיעַ

男の右手から光が出た

そこには里田の死体があつた……

「俺の死体！！！！」

ザッ！

！？暗くてよくわからないが五本の棒のついてるものが顔に近づいてくる

おそらく手だ。

手が顔についた時、バチバチと火花をちらして体がビリビリと破けていく

痛みはない。
・
・
・

ただただ自身のからだが破けているのを眺めているだけだった
 ビチビチビチバチツバチツビー！

『うわあああああああああああああああああああああ
あああああ！！！』

黒い服を着た男は言った

「俺は殺し屋キラーと呼ばれている、でも実際には人を殺していないんだ

死体のダミーを依頼主に見せて金を受け取るっていうのがおれの手
□や」

「んで、お前が生きてるってばれたら厄介だろ？だから隠すんだ、おれの作った理想郷へ」

「ムーウへ……！」

ブ
オ
ツ
・
・
・
・
・
!

光が飛び散るとともに

丸い、広場のようなところについて
城のようなものはあり 噴水もある

・ ・ ・ ・ ・
デジャヴ
・ ・ ・ ・ ・

どこかで見たとがあるような感覚だ

「あーここに来たやつはみんな既視感があるみたいなんだよ」

「よくわかんねーけどなあ」

「！そうだ！！！なんなんだよここ！？」

「ここ？あームウーウっつーところだよムー大陸ってしってるだろそれから名前とった

おれに死体ダミーを作られたやつらはみーんなここにいるんだよ」

「はっ！？いみわかんねーよ！？なんでこんなところにいなきやいけねーんだよ」

「はあー・・・説明だるい！！！」

「お前らが生きてるってばれたら厄介だからだよ！！！」

「んじゃ死体ダミー見せて金もらってくるから！ちよつとまってるよあー！」

「ちよつ・・・おっ・・・」

「・・・っ！」

里田が手を伸ばした時　すでに男は消えていた

・・・・・・・・・・・・・・・依頼主との会話・・・・・・

バタッ

「どうぞ！これくらい痛めつけたけどコレでどうだい？」

依頼主はかなり嬉しそうな顔をして　言った

「ああ・・・こいつだ・・・こいつを殺してほしかったんだ！ありがとう・・・」

「ん」

キラーは手を差し出した

「ん？」

依頼主は不思議そうにこつちをみた

「ん」

キラーはもう一度手を差し出した

「ん・・・」

依頼主は眉間に皺をよせた

・・・沈黙が流れる

すると いきなり 依頼主は手をたたき言った

「ああ！金ですね！」

バタツ！

依頼主は大量の金が入ったキャッシュケースを出した

男は依頼主から金を受け取り光を出しながら消えてった

ジリジリビツ・・・ビツ

・・・
・・・
・・・ムウーウ・・・
・・・

「あつ！！！！おめー！！！！おれはこれからどうすればいいんだよ！」
戻ってきたキラーに向かって里田は叫んだ

「あーあーうるせーなー だ！かーら！ここで！！！！おまえは暮らすんだよ！」

「な！ん！で！」

「何で理解できないんだよ！」

「おまえはあつちの世界で死んだことにしたの！！！！だーかーらー！！おまえをあつちの世界においてったら おまえが見つかって、おれがペテン師ってことばれちゃうだろ？」

「わかりましたか？」

里田は口を尖らせた

「じこちゅー・・・」

「なんか言った？」

「自己中心的！！！！！！！！！！っていったんだよ！！！」

「うつせつ！」

「・・・あつ！！・・・」

キラはその場にうずくまった

「ちよつと一緒に来てくれ・・・付け根が痛む・・・」

「何でオレがこんな目にあわなきゃいけないんだよ」

「なんやかんやいいながら里田は男へ付いていった

「なあお前キラって言うてるけどさ本名なの？」

「ん、ああすぐにわかるよ」

「？」

「ついたぞ・・・このオンボロアパートだ」

「・・・周りは噴水とかあってきれいなのにここだけ汚いな・・・」

「建物とか黒いだろ？これさ、でかいガスバーナー使ったりしてる

女がいるんだよ

そいつが黒焦げにしちゃってんの」

「怖いな」

「ああ、怖い」

ガチャンツ！！！！

「おー美央！！付け根が痛むから見てくださいよ！！」

美人がそこにすわっていた

真っ黒な髪の毛が肩までいつていて

フードのついた服の上から工場の作業服を着ている

童顔で赤い頬をしていて大きな目

里田のタイプであった

「んー・・・また痛くなつたのどこ？みせてみて」

美央が立った

「うあっ！？」

里田はおもわず叫んだ

「へっ？」

口を大きくしてぽかーんとしている美央

「フードの上に作業服はわかるぞ・・・わかるぞ・・・」

「ミニスカにニーソックスっておまああああっ！！！！！！！！！！？

萌えーーーーー」

「変態めが・・・」

鋭いキラーの声

「おまえにニーソックスのよさがわからないか！ 絶対領域の黄金比を守ってるじゃないかこの美央って子！！！！ちなみに黄金比は4：1：2．5 だ！！！」

「いやー実にはいい絶対領域だ」

「ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「え・・・」

「もう一回言うね ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

里田はその場で立ち竦んだ

「気持ち悪い・・・キモ・・・キモチ・・・ガーン」

キラーはため息をついた

「おい美央んなことより見てくれよ」

「あつごめん えつとお・・・どこ？」

「右の肩だよ」

「ちよつとみせてみてー」

キラーは服を脱いだ

そこには3つの縫い線がはいつていた

美央の手が動きナイフのようなものを取り糸を出したそして注射器をだし

とても複雑な作業をしている

キラーのからだを縫っているようにもみえただ切断してるようにも見える

「医学方面に特化していない自分にはよくわからねー 何やってんだこれ」

「んあ？医学方面に特化してもわかんねーよこれ 神様からの天罰だから」

「はあ？」

「よし！オツケー！ちよつと動かしてみてよ！！」

キラーは腕をぶんぶんふった

「おお　痛みが消えた、ありがとう！　また痛くなったらくるよ！
じゃっ」

「あつ　ちよつとまつて　骨と筋肉のチェックするからそこに寝て」
「んあー」

下には大量のパイプのようなものとSDカードのようなものがある

機械と聞いて頭に思い浮かべられるようなものだ

そこには平らな板がありそのうえに大きな板がおいてある

キラーは板と板の間に横になった

「ちよつとこつからは見ちゃだめね」

美央は里田の目を手で覆った

「えっ？」

「すこしグロテスクだから」

びしっべちよつぶつ　べちよべちようぶつ！

「ねえ　何でニーソックスなんかすきなのか？」

「俺はこの世の美だと思ってる、男はたいていニーソックス大好きだよ」

「ふーん　生人^{きこ}はじろじろみてこないのに・・・」

「はい！？なんかいった？」

「なにもいって『お楽しみ中わー』が、終わったんで帰っていい？
美央が話しているのに男が叫んだ

「ちよつとまつてすぐに結果出るから」

「あーいーよいーよ、結果は後でメール送ってきてくれよ」

「んじゃっ　いくぞ里田」

「わかった　じゃーあとでメール送るね」

「そろそろ目隠しやめてくれない？」

「あっごめん」

「あまり体いたためちゃだめよ生人^{きと}」

「おうっ　じゃあな！」

バタアンツ

「ふうーん・・・ニーソックスって・・・萌えるんだあ・・・」

「！何考えてるんだ・・・あたし」

「おまえキトっていうの？」

「ん、あー　そうだけど？　だからさっきいったろ？すぐわかるって」

「あいつおれのこと生人ってよぶからさ」

「おあついねー」

「たしかに暑いな」

「そっちじゃなくて」

「？」

「それにしてもお前のその体どうしたんだよ・・・」

「縫い目ばかりじゃねーか」

キラーはニヤけながらこう言った

「天罰だよ」

里田は目を大きくした

「天罰？」

「神様がさ　おれに与えた天罰　『おまえのような人間には天罰が必要だっ』て！」

「だからおれは今人を殺さない殺し屋やってんだ」

「え？」

里田は痛々しい物を見ているような目でキラーを見ている

「いや・・・言い過ぎた　なんでもねー」

「気になるだろが！！！」

「うつせえな！なんでもねーつつってんだろ！」

「いや気になるって！」

「う！る！さ！い」

「いずれかわかるんじゃね？」

「いずれかっていつだよ」

「しらね」

「なんだよー おしえろよー」

続く

謎の男達

〈第2章〉

謎の男達

「おまえに教える義理はないよ」

「ちえっ！ケチ」

「ゴソ・・・ゴソ・・・ゴソ・・・」

「いくぞおおおおおおおおおおお！！！！　うおおおおおおお
おお！」

「なんだなんだ・・・どうしたんだ　誰か叫んでるぞ　キラー」
だだだだ！

路地から大量の人がこちらにむかつてはしってくる

「覚悟おおおおおおおおおおお！！！！」

グサツ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バン！！！！

美央は机を叩いた

飛び散る資料　跳ね上がるキーボード

「筋萎縮！？うそ！」

「アイツ・・・筋萎縮になる理由なんてないのに・・・やっぱり

天罰が・・・」

「早くいかなきゃ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うつ・・・」

「キラ・・・」

大量の男達に囲まれている中

目の前でナイフで刺されている　キラが居た。

キラは刺される前に震えていた・・・

そして今も震えている

ゆっくり拳を振り上げたキラは　ナイフを刺したまま体を捻る

刺した人はすこし後ずさりする

ブオッ！！！！

拳がまっすぐ　捻りながら前に進むその拳は　キラを刺した奴へ
当たる。

そいつは拳の力で飛ばされた

ズ！！！！キ！！！！

「！！」

「うつ・・・」

「キラ・・・どうした体が震えてるぞ・・・」

「筋肉が・・・」

「え？」 「筋肉が・・・」

「筋肉が言うことを聞かねええええ！！ うあああああああああ
あああああああああああ！！！！」

キラーの叫びで里田は少し後ずさりする
すると・・・

ダッダッダ！ 左の方から足音がする

里田は左をみた

そこには 拳を突き出し 走ってくる男が居た

男は身を乗り出し飛び出してきた

ガッ！

里田は体重を左に移動し 右手で飛んでくる腕をつかみ 左手で男
の下半身を抱いた

そして 体重を右に移動し 右手をいきおいよく 下におろし 左
手を勢いよく上に上げ 投げ飛ばした

「いつきなりなぐりかかってくるってどういう事だボ・・・」

言い終わる前に新手の男がやって来た

男は手を地面におき 下半身を里田に伸ばして 蹴りを入れようと
してきた

里田は手を上に上げながら後ろに飛んだ

そして落ちそうな下半身を足で蹴り上げ、上に上げた両手で下半身
をたたき落とした。

「ボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

里田は脅威の身体能力で一気に二人を軽々と相手にした

が

里田は自分の背後に人がいるのにきがついた

里田の振り向く暇もなく 里田はやられた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ダッダッダッ 「速く！！速くしなきゃ！ 急がなきゃ！」
美央が走ってくる

ビルの上にそれをのぞく髪の毛の長い男が立っていた。

「・・・・・・・・！！」

美央が駆けつけた時に見たモノは・・・里田とキラの血まみれになつて倒れている姿だった

「生人！！」

「あ？」

大量の男の中の一人が振り向いた

「女がこつちくるんじゃねーよ！！」

男は美央に近づき殴りかかってきた、その拳は美央にヒットした
よろめく美央はにやけて言った

「いったいなー・・・もう」

男は眉間に皺を寄せた「言っとくけど・・・女でも手加減は」

「一丁・・・」

美央は右脚で地面を蹴り男の横に飛んだ 左脚で着地し 曲げた右
脚を回し 力を入れ 男の顔を蹴った！

「逝きますか！！」

ヒットしたと同時に曲げた足を伸ばして 男の肩に踵を落とした
そして再び 男を蹴り飛ばした

ガシッ

飛んでいった男の頭をつかんだ男が居た

続く

過去の過ち

第三章

〈過去の過ち〉

日本

今、日本は突如地球上に現われた自らを快樂人と名乗る人達に支配されている

今の日本は墮落しすぎている、今や人殺しは日常茶飯事だ。 警察も日本から消えた。

そこら辺に死体が転がっている状態・・・と言うわけではない 快樂人という人達に支配された日本にも法律はある

無法地帯と言うわけではない

が

ほぼ無法地帯だ、ただ法律はある 死体は指定された所に必ず埋めることだ

今日本は 二つの職業が増えた

殺し屋と死体埋葬屋だ

人を殺す人と

人を埋める人だ

殺したり 埋めたり 今の日本は腐っている

こんな日本には殺し屋がいる　自分で恨みを持つている人を殺した
ら　恨みを買　い　殺される

みんな自分が殺されるのがイヤだから 殺し屋という職業に頼むのだ

その殺し屋の中でも殺した人が最も多い生人という青年がいた

[illegible]

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアあああああか！」

「あんた達さ！！生人の事なあああああああんにもし
らないでしょ！！」

「お伽噺してあげるよ……」

「人を殺す専門の職業『殺し屋』がいました」

「その『殺し屋』は神様に天罰を下されました 体をバラバラにされ またつけあわされました」

「てきとうに付け合わされたので 付け根がすごく痛みます」

「幼馴染の医者になおしてくれと縋りました、幼馴染は頑張って治そうとしました！ 昔よりは痛みは和らぎました」

「しかしまだ付け根はいたむので幼馴染に治療してもらってます」

「神様は天罰を下すときいいました。『30億集めてなおかつ人を殺さなければ 元に戻してやろう』と」

「そんなお金を集めることは困難なので 神様は力を与えました」

「左目でいろんな事ができるようになりました！でも仮面をつけられてとれなくなりました！今その力で殺し屋と名乗って人を殺さない殺し屋をしています！」

「今日でやっと！」

「29億8960万貯まりました・・・」

「明日大きな取引があるから3億たまる！！　そしたらムウーウの人達を戻してやろう！！・・・て・・・」

「言ってたんだよ……その殺し屋……生人が……」

「それなのに……あんた達！！何も知らないのに 生人の考え知らないのに！！」

ガツチリした男はしゃべり出した

「ああ・・・そうなのか・・・でもよおキラーは俺たちになんも話してくれなかった 自業自得じゃねーのか」

「でもよオ……オメエには罪はないよな……」

男はロープをほどいた

そして 男達の方に振り向き首を縦に振った

男達は一斉に地面に手を突き

頭を勢いよく地面にたたきつけた

「悪かった!!!!!!!!!!!!!!」

美央はにやけた

「!なんだ話通じるじゃない」

「オイ」

ゴソツ
・
・
・

キラーが立ち上がり言った

「みつともねえことすんな・・・ 男が頭を下げるな・・・」
「立てよ」

ガツチリした男は言った「別にお前に頭を下げてるわけじゃねーんだからいいじゃねーか」

「明日まで待つてやるから 今日の事は この俺 ひきだし引出 ふすま襖に免じて 許してくれよ」

襖が頭を下げようとしたときビルの上から声が聞こえてきた

「あーあ 終わっちった・・・」

空から長い髪の毛を靡かせた人が振ってきた

トッ！

男が落ちた来た時足音が全くしなかった

キラーは後ろに下がった

タツ・・・タツ・・・タツ

「もうすこしさわいでんの見たかったのにイ・・・」

キラーは仮面の外側からでもわかるぐらいに 目を大きく見開いた
「神・・・」

「よオ」

ふあさ・・・

膝のあたりまで伸びた長い髪を垂らした 真っ白な、ボタンがたくさんついた服を着ていて

白いぶかぶかなズボンをはいている男は言った

「罪人」

キラーはかなり震えている

「神様！！！」

「神様？」

襖はかなり不思議そうな顔をしている

キラーは少し驚いたような口調でいった

「筋肉が動く！？」

神様は一瞬にしてキラーに近付き 言った

「ああ！！ 面白そうだったから お前の筋肉萎縮させたんだ！！！」

襖は眉間に皺を寄せ鋭い眼光でキラーと神様と呼ばれている男を睨んだ

「神様って何だよ！」

続く

楽しむ男

「神様って何だよ!」

「ああ・・・神様つつつても創造主とかそういうのじゃないからね、あくまでも神様って名前のフツツーの人だからさ」

神様は言った

「ふつう!? ふざけんなよ!! 異常じゃねえか!!」

「・・・」

神様はすこし不機嫌そうに言う

「ああ・・・そうだ」

「明日で30億たまるんだろ?」

キラーは戸惑った、今まで神様と話した事はほとんどないのだ

「あ・・・ああ・・・」

「明日やるのは面倒だから今やっところかな・・・」

神様は右脚を上げた

ダッ!

その右脚で強く地面を蹴った

一瞬にしキラーの目の前に飛んでいった

「!!」

バチッ!!!!!!

「解放してやるよ・・・」

神様は笑みを浮かべた、そして・・・叫んだ

「罪人!!!!」

そして一筋の稲妻がキラーの体を横切った、その一筋の稲妻から無

数の雷が散った

チヂッチヂヂヂヂヂ！ 音を立てながら広がっていくその雷の動きが止まった

キラーは四肢を大きく開き空中に浮かんだ

動きが止まった雷はどんどん小さくなり、キラーの中心へ集まっていく。

その雷がある程度ちいさくなったあと、また、周りへ散った

「うおっ！」

そして雷は、消えた

「！」キラーは慌ててネクタイを外した

そして来ているスーツを右へずらし右肩を見た、キラーは叫んだ・

「……体が治ってる……！！！！！！！！」

そう、そこにあつたはずの縫い目、いや、傷が無くなっているのだ

キラーは全身の傷を探し始めた

しかし、残っている傷は……

無かった（ナッシング）

「……何で戻した？」

服を戻しながらキラーは聞いた

「オレ……末の嫌いなんだよ……明日でたまるんだったら別にそれでいいさ。」

キラーは取り乱した

「オレアお前の考えがわからねえよ！」

「わかんねえ……か、わかんなくていいさ……」

「オレはこの世界を楽しむんだ……！！」

「オレはもつと楽しむ」

先ほど神様が降りてきたビルの扉に人影が見えた
神様が動揺した「まさか!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

人影がどんどん大きくなってきた

「人生!!」

顔がだんだん見えてきた

「楽しもうぜ!!」

その男は腰に刀を差していて、服ははだけている、だらしのなさそう
な姿をしている。

「兄貴・・・」

神様は汗をかき、口を震わす

「よ!!」

「何しに来た!!」

神様は聞いた

そしてその兄貴と呼ばれる男はすこし残念そうな顔をしていった
「ひどいなア・・・忘れたの?」

次の瞬間男の口が大きく開いた

「オレは人生を楽しむ為だけに生きてる!!」

「我楽しむ!故に我有り!」

男は言い終わると共に牙を剥きだし、不気味な笑みを浮かべた・・・

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247y/>

生かし屋キラー

2011年12月2日21時47分発行